筑紫女学園大学リポジト

Education in Language and Culture Studies from the Perspectives of Gender: Interviews with Manga Researchers

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-12-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹内, 美帆, 高山, 百合子, 大城, 房美, TAKEUCHI, Miho, TAKAYAMA, Yuriko, OGI, Fusami メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/921

ジェンダーの観点から捉える「言語文化」教育の研究
―マンガ研究者を対象とする面接調査―

竹　内　美　帆・髙　山　百合子・大　城　房　美

Education in Language and Culture Studies from the Perspectives of Gender: Interviews with *Manga* Researchers

Miho TAKEUCHI, Yuriko TAKAYAMA, and Fusami OGI

Ⅰ．研究の背景と目的

近年、大学教育におけるカリキュラムにジェンダー教育を取り入れることの重要性が認知されはじめている。報告者および本研究の共同研究者が授業を受け持つ筑紫女学園大学でも、2015年度から全学共通の副専攻として「女性の生き方を考える副専攻」が創設され、ジェンダーに関する科目が各学科において横断的に設置された。報告者を含む共同研究者が携わった「女性と言語文化」は、全学共通科目として設定された「女性」というカテゴリーの中の主要科目であり、女性・ジェンダーに関する言語表現や女性による文化活動がどのように現在の社会とつながりを持つかという視点を学び、自分と社会との関係を問い直し、多様な価値観を認めながら物事を考える力を養うことをねらいとして定めている。この授業では、１年生を中心として毎年250人ほどの学生が受講し、全受講者を半数に分け２クラスを作り、２名の教員が途中でクラスを交代しながらそれぞれ約６回の授業をおこなう。「言語文化」の領域として髙山百合子が日本語、大城房美（2015年度は竹内）がマンガを取り上げ講義をおこない、最初の数回と最後の１回は合同授業による導入と総括をおこなった[1]。

「言語文化」としてマンガを取り上げるということに目新しさがあるかもしれないが、2000年代半ば以降、京都精華大学マンガ学部（2006年設立）をはじめとして「マンガ」と名の付く学部、コースを設ける大学が増加[2]し、さらに、特に人文社会学系の科目において、「日本文化論」や「メディア論」等の名の下でマンガに関する授業がおこなわれることも増えてきた。マンガは戦後日本においてコミュニケーションの手段や場として多様な表現方法が確立されており、ある種の「言

語」として機能してきたといえる。さらに少女マンガというジャンルやそこで活躍する女性作家、読者としての女性など、文化と女性との関わりを考えるための切り口が多数見つかる。

一方で、人文系学問や教養教育が軽視されつつある現在の大学をめぐる状況において、ジェンダー教育や言語文化に関する教育が大学に根付き、存続していくのかという問題がある。ジェンダー教育に関していえば、筑紫女学園大学のような試みは全国的にも新しく、大学によってはこうしたジェンダーに関する教育への取り組みが十分になされていない場合も多い。そして、筑紫女学園大学のような「女子大学」の存在意義と、そこにおける女子高等教育をどう考えるかということについては議論が十分に重ねられていない[3]。このように「女性と言語文化」を担当する中で、ジェンダーに関する教育と、言語文化に関する授業をおこなうという領域横断的な教育活動の重要性[4]と、それを実施することの課題が見えてきた。そもそも、このような言語文化に関する授業に関しては、教授法や実践例などの蓄積がない状況の中で、それぞれが試行錯誤の中で授業をおこなっている現状があるといえる。

このような状況を踏まえながら、本研究では、ジェンダーとマンガの両方に関わる授業をおこなっているマンガ研究者を対象としたインタビュー調査を実施した。ジェンダーとマンガの両方に関わる授業とは、ジェンダーについてのトピックをマンガに関わる科目で取り上げる場合、およびジェンダーに関わる科目でマンガを取り上げる場合が考えられる。なぜ今回マンガ研究者を対象としたかといえば、報告者竹内および共同研究者である大城の専門領域がマンガ研究であり、上に挙げた「女性と言語文化」の中で、マンガを中心に取り上げた授業をおこなったことにある。その中で、マンガ（作品および文化）がジェンダーというテーマを学生と一緒に考えるための素材として適しているのではないかということを実感したほか、それを取り上げることの困難さや、どのようにそれを取り上げればよいかという問題にも直面したからである。

そのため、本研究では、インタビュー形式の聞き取り調査を通して、まずジェンダーとマンガに関わるどのような授業をおこなっているか、その授業をおこなう上でどのようなことが課題となるか、またその対策としてどのようなことを実施しているかなどの授業実践に関する実態を把握し、ジェンダー論とマンガ研究の領域横断的な授業をおこなうことの利点をどのように考えているかについて把握することを目的とする。

Ⅱ．研究方法

2016年10月、日本の大学においてジェンダーとマンガに関わる授業を担当している大学教員３名にインタビュー調査を実施した。インタビュー対象者は、日本の大学においてマンガについての研究をおこなってきた研究者であり、所属大学で専任教員として教鞭をとる教員である。３名の所属大学はそれぞれ異なる。選別基準としては、マンガに関する授業を担当し、なおかつジェンダーについても取り上げているということからインタビュー対象に選んだ。このうち１名へのインタビューは竹内と一対一でおこない、残りの２名へは公開研究会という形で、竹内と髙山が

おこなった。前者のインタビュー時間は約１時間半、後者は約３時間であるが、平均して１名に対して１時間半の調査をおこなったことになる。事前に調査項目に対応する質問を列挙した質問用紙を送り、回答を考えてもらった後、インタビュー時に口頭で聞くという形式をとった。

調査項目は「授業内容」「教授法」「学生の反応」「学内環境」「マンガと教育一般」「海外におけるマンガ教育」という６つの項目であり、その項目に関する13の質問を提示した。詳しい質問内容は以下のとおりである。

（１）授業内容

１）現在おこなっている授業の概要（内容、学生数、時間）、学生の雰囲気（男女比、興味の範囲、卒業後の進路など）。

２）現在おこなっている授業においてマンガを取り上げる割合はどのくらいか（他のメディアやテーマを取り上げる場合はその割合も）。

３）該当授業のカリキュラム全体の中での位置づけ

（２）教授法

４）特にジェンダーに関する問題を意識的に取り上げているか。取り上げているとすればどんな内容か（具体的な作品名、授業実践例など）。

５）ジェンダーを学ぶ教育として、マンガが適切な題材であると思うか。

６）マンガを扱う際に、意識していること（注意点、避けることなど）

（３）学生の反応

７）全体として、当該授業に対する学生の受け止め方、反応はどのようであるか。

８）特にジェンダーやマイノリティの問題、性的な問題などを扱った場合、学生の反応はどのようなものだったか。また、注意すべき点などがあるか。

９）学生の性差によって、授業の内容に対する反応が変わると感じるか。また、教え方を変える必要があるか。

（４）学内環境

10）今日の大学教育において、ジェンダーに関する授業の必要性が高まっていると感じるか（在籍する大学におけるジェンダー教育の取り組みなど）。

（５）マンガと教育一般

11）大学教育、とくにジェンダー教育において、マンガを取り上げることにはどのような意義があると考えるか。

12）マンガ研究と他領域の研究分野（特にその他の言語文化に関わる研究）についてどのようなコラボレーションが考えられるか（特に教育現場において）。

（６）海外におけるマンガ教育

13）（知見のある範囲での）外国の状況はどのようなものであるか。

このインタビューによって調査しようと試みたことは、まず具体的にどのような授業をおこなっているか、どのようにそれを実践しているか（教授法）、それがどのような環境の下おこなわれているか（学生の様子、カリキュラムにおける位置づけ、大学全体の方針など）、授業に対する学生の反応はどのようなものであるか、ということである。さらにそれらの調査に加えて、インタビュー対象者が考えるジェンダー教育の課題やマンガを取り上げることの利点や工夫している点などを聞き取ることを目指した。

限られた時間内での調査であったため、特に「（６）海外におけるマンガ教育」に関する回答までたどり着かなかった場合もあるが、それ以外の項目については十分な回答を得ることができた。

Ⅲ．インタビュー調査結果

以下では、３名におこなったインタビューを、一人ひとり順番に適宜発言を引用しながらまとめたうえで考察し、最後に３名へのインタビュー調査から見えてきた課題を検討する。インタビュー時の質問項目は上記に挙げた６項目からなる13の質問であるが、以下でまとめる際には、インタビュー時に特に言及の多かったトピックをもとに「（１）授業について」「（２）学生について」「（３）教授法について」「（４）学生の反応について」「（５）マンガを扱う際の注意点」「（６）大学教育におけるジェンダーに関する授業の必要性」「（７）ジェンダーを学ぶ教育においてマンガが適切な題材であると思うか」という７つの項目として再編成し、まとめていく。上記の調査項目とは順番が異なるが、13の質問に基づく内容である。

なお、下記で登場する授業内容や受講生数は、インタビュー時点のもので、現時点でのものと異なる場合がある。３名の所属大学や担当科目などは、プライバシーの観点から内容に支障がない程度に伏せておくこととする。また、文章中ではインタビュー者の発言を報告者がまとめて記し、報告者のコメントについては段落を下げて表記する。

１．Ａさん［30代、女性、私立大学文理系学部所属］

Ａさんは所属大学の家政学部に所属し、主に社会学に関する授業を受け持っている。「社会学」、「地域文化研究」、「流行論」などの授業を担当し、特に「流行論」においてマンガを取り上げている。

（１）授業について

「流行論」という授業は専門科目のなかの選択科目で、４年生向けの科目である。授業を受講している学生の男女比は９：１（女：男）で、15人中３人が男子である。この男女比は、学年全体の男女比ともほぼ対応しており、学校全体でも女子の比率が高い。全15回の授業の中で、マンガをメインに取り上げていて、マンガ史の流れに合わせて、明治大正から現在に至るまでのマンガ文化に関わる事象や作品を取り上げる。明治期の子ども文化から始まり、戦前の赤本、戦後の

貸本、1970年代少女マンガ、そして現代のエッセイマンガやBL（ボーイズラブ）マンガ[5]なども扱う。1980年代以降は年代順にというよりも、海外コミックス文化、エッセイマンガ、同人文化、などトピックを追うように取り上げている。

授業内容としてはただ単にマンガ史を教えるのではなく、その当時の時代背景や思想と個々のマンガ作品を関連付けて提示する。例えば、70年代のウーマンリブと池田理代子「ベルサイユのばら」（1972-1973年）を関連づけ、マンガが描かれる背景にどのような女性をめぐる状況があったかを解説するなど。授業方法は、主にパワーポイントを使ってマンガの図版をスクリーンに映しながら解説をするという形式で進めていく。特に歴史的な話題や過去の作品について語る場合、学生の興味を引き付けるために、出来るだけ現物のマンガ作品や、パワーポイントで写真を見せることを心掛けている。

（2）学生について

この授業を受講する学生は、「マンガが好き」という自認を持つ学生が多く、マンガに関心のない学生はあまり受講していない。学生の雰囲気としては、自分の所属する専攻自体がその他の専攻と比べ、資格試験などのための授業が少ないため、カリキュラムにゆとりがあるということもあり、のんびりとした気質の学生が多く、この授業においてもどちらかといえばインドア派の学生が多い。ジェンダーに関する学生の意識としては、女子学生の場合、良くも悪くも女性であるということに違和感を持っていない、ジェンダーを無批判的に受け入れている学生が多いという印象を持っている。しかし、それはこの授業を受講する学生特有のものというものよりも、この大学のある地域の特質であるかもしれない。なぜなら、この地域が日本有数の工業地域であり、大企業およびその関連会社に勤務する人の割合がとても高く、経済成長期の古いタイプのライフスタイルや家族像を思い描いている場合が多いのではないか（この地域特有のジェンダー観については「（6）大学教育におけるジェンダーに関する授業の必要性」の項目で詳しく述べる）。

（3）教授法について

「ジェンダー」という話題をどのように授業に取り入れるかということに関して、「ジェンダー」という形でやるのではなく、それぞれのトピックの中にジェンダーの視点を取り入れながら取り上げるということを心掛けている。例えば1960年代末の劇画に関する話をするときに、「男らしさ」がどのように表現されているか、そしてそれがどのように破たんしていくかを見ていったり、1970年代少女マンガとウーマンリブを関連付けたり、またなぜBLマンガが女性に受け入れられたか、なぜ主婦がエッセイマンガを描くのか、などそれぞれのトピックの中でジェンダーの問題も考察する。主としてジェンダーのテーマを取り上げないときでも、キャラクター造形やストーリーの展開、当時の読者の価値観など、ジェンダーの視点は織り交ぜながら話すようにしている。

（4）学生の反応について

マンガを扱った授業に対する学生の受け止め方や反応について、当該授業においては今のところ好評で、男子学生も含めてBLマンガを扱った場合の反発は全くなく、好意的な反応が多い。特にBLマンガについて、「よく名前を聞くけど、これだったんだなとわかりました」や「母親

が読んでいるんで」といった意見や、BL を好む学生から「こういう作品も取り上げてください」といったリクエストをされることもある。

一方で、これまでの経験上、別のクラスで BL マンガを授業で扱った際に、反発を受けたこともある。さらにいえば、女子学生からの反発が男子学生のそれよりも多かった。反発の理由は二パターンあり、一つは BL マンガを好む、いわゆる「腐女子」と呼ばれる学生たちが、自分たちのものである BL をオープンに語ってほしくないと思う場合である。もう一つは、BL マンガを読んだことがない学生が、「理解できない」「腐女子はキモイ」といった蔑視的な態度を取る場合である。また、「性的な表現を見たくない」という学生もいる。そうした経験から、BL などの女性向けマンガや、マンガの性表現の問題を扱う場合など、性的なトピックを取り上げる場合には、学生に事前に注意喚起を必ずしている。「今日は性的なトピックについて扱います」、「今から見せるスライドには性的な場面が出てくるから、見たくない人は伏せておいてください」といったことを事前に伝えたうえで、授業に入る。実際伏せる人はいないが、「見たくない人は見なくていいからね」と言っておくと、学生から「注意してくれたからよかったです」という反応があった。

（5）マンガを扱う際の注意点

特に気を付けているのは同人誌と性的な表現についての扱いである。同人誌については、テーマとして取り上げることはあるが、同人誌そのものは授業で扱わないようにしている。既存のマンガやアニメのキャラを使った同人誌というものの存在自体が著作権的にグレーゾーンだということと、ファンが好きでやっている活動でありそのコミュニケーション・ツールとして同人誌があるので、まったく別の場で、知らない他人に見せるものではないと考えるからである。どうしても同人誌の現物を取り上げる必要があるときは、自分の知り合いの作家が描いたもので、使ってもいいかと了承を得たうえで「これは私の友達が作ったものです」、と伝えるように配慮している。BL マンガの画像を見せるときは、セックスシーンは使わないようにしている。せいぜいキャラクターが告白をしているシーンを見せるぐらいにとどめ、直接的なシーンは見せない。

マンガというメディアの特徴として、フィクションと現実を曖昧に絡み合わせるということが可能であるということが挙げられるが、逆にフィクションとして描かれていることをそのままストレートに事実として受け取ってしまう学生もいる。予備知識の少ない学生が、マンガのフィクションとしての表現をそのまま同時代の現実の社会の反映や、作者の思想の反映だと受け取らないように注意を喚起するようにしている。マンガの一場面や表現を見せる場合でも、「これはマンガだからね」と強調している。マンガの表現は誇張したりステレオタイプになったりしやすいので、見た瞬間に分かりやすく登場人物の性格や役割などが把握できるように作られていることなどを説明し、それと現実の価値観を混同しないようにとは言うようにしている。

（6）大学教育におけるジェンダーに関する授業の必要性

今日の大学教育において、ジェンダーに関する授業の必要性はとても高く、大切だと考えている。家政学という領域と、大学のある地域との関係から、古いジェンダー規範を内面化している

学生が多いという事実があり、学生は「女の子は専業主婦になって、地元の企業で働いている人と結婚する」という人生を一般的な女性の生き方として思い描いている。こうした考え方にみられるように、保守的な人生モデルに対して疑問を持たずにいる学生が多い。さらに、家政学という領域を専攻する学生の中には、フードコーディネーターや家庭科教員の免許を取得して社会に出るという道も開かれているにもかかわらず、家政学を学ぶことを花嫁修業として捉える風潮もある。

このような状況の下、ジェンダー教育は、ジェンダー規範そのものに気づいていない人を気づかせることが大事だと考える。上記のようなジェンダーに意識を向けていない学生にとっても、いつかジェンダーの問題を意識する場面が訪れたときのために、ジェンダーを学ぶことは必要である。例えば就職活動で女性だからといって選考で落とされたという時に、それが性差別だと気づかなかったら、「私が悪かったんだ」とか、「私が面接のときにダメだったんだ」とか、自分を責めてしまう。そうではなくて、ジェンダーに意識的になれば、社会の構造の問題であり、自分が悪いのではなく社会を変えるべきなんだ、と思うことができる。ジェンダー論を学ぶことによって、自分が受けた差別を社会の問題として捉えることができるようになるのではないか。

さらに、学生に対するジェンダー教育だけではなく、教員のジェンダーに対する意識を高めることの必要性も実感する。例えば、本大学において「ジェンダー論」という科目が、4年の後期に設定されているというところにも、ジェンダー教育を軽視する大学側の姿勢が伺える。さらに、現在、所属学部には女子の割合が多いが、男子の学生も所属している。そうした男子学生の中には、既存の「男らしさ」というジェンダー的価値観にとらわれず、かわいい小物を作ったり、お菓子を作ったりするのが好きだという学生も多い。しかし、教員側が「男のくせに男らしくない」といったような、ジェンダー規範を押し付けるような言い方をしてしまうこともある。大学全体における女性教員の割合が少ないことや、役員などが男性教員で占められていることなども、日本の社会におけるジェンダー規範を反映しているだろう。

> 「ジェンダー教育とはただ単に「ジェンダー論」という授業をおこなうだけで完結するのではなく、あらゆるところでジェンダー・フリーの教育がなされていない限り、「あの先生はああ言っているけど、実際は違う」ということになってしまう」というAさんの発言からは、個別の授業で完結するのではなく、カリキュラム全体や、大学側の態度自体も学生に対する教育をおこなう上で重要なポイントであることが指摘されている。

（7）ジェンダーを学ぶ教育においてマンガが適切な題材であると思うか。

基本的には、「ジェンダー」という問題は、ジェンダー論などの中でやるのももちろん必要だが、それよりも幅広く様々な科目でジェンダー・フリーのような状態があるのが理想だと考えている。自分の授業でも、ジェンダー的なトピックはその都度織り交ぜており、ジェンダーの視点はあらゆる題材、教科において必要であると考えている。その意味で、マンガを通して考えることができるジェンダーの問題もたくさんある。そういったポジティブな面もある一方で、「マンガはわかりやすいから」という感じで、安易に用いてしまうと、間違ってしまう場合もある。例

えば、「最近女性たちはBLというものをたくさん読んでいるので、今の女性たちは現実の男性よりも二次元の男のホモソーシャルな関係に憧れている」など、フィクションの表現を現実の認識と直結させてしまうような視点に陥ってしまいかねない。作品が置かれているコンテクストや歴史性、メディアとしての特性など様々な視点を考慮する必要がある。

2．Bさん［40代、女性、私立大学文系学部所属］

Bさんは所属大学の国際関係の学部において文化論やメディア論関係の授業を中心に担当している。ヨーロッパ圏出身という出自や自身の読書経験を活かし、文化人類学、比較文化論的な視点から少女（女性）マンガ、特にBLマンガやその海外における受容などを研究してきた。大学では、「大衆文化論」「マンガ文化論」「芸術メディア論」「ジェンダー論」などの他、留学生向けの日本のポピュラーカルチャーに関する講義、集中講義、市民講座なども担当している。これらの授業ではマンガを取り上げる場合が多く、マンガ以外では映像文化、特に映画に関わるものを扱っている。

（1）授業について

授業においてマンガやジェンダーについて扱う頻度は、一年生向けの「大衆文化論」や「映像文化論」において、全面的にではないが全15回のうち2～3回ほどマンガについて触れたり、ジェンダーについて触れたりしている。「ジェンダー論」においては、マンガは1回ほど取り上げる。これらの科目は選択科目で、学生の数は60人のものから300人とかなり多いものもある。自身のゼミでは、大衆文化とジェンダーとの何らかのつながりのあるテーマ、もしくは大衆文化のみ、ジェンダーのみのどちらかを扱う学生が所属している。大学全体において女性教員が比較的少なく、その中でもジェンダーと関係のある科目を担当しているのが数名に限り、例えばLGBTや性同一性障害などについて関心がある学生も、マンガに興味がなくてもゼミに入ってくる。

（2）学生について

授業における男女比はだいたい6：4（女：男）で女子が若干多い。大学全体の男女比と対応しているが、学部によって男子が多い学部（農学部、工学部）、女子が多い学部（文学部）があり、所属している学部は女子が多い。国際学部という学部の性質上、学生の興味が様々である。

（3）教授法について

ジェンダーに関わる授業については、例えば学生に1970年代の少女マンガ（教員側が指定したもの）の中から学生が一シリーズ選び、それを読んでもらい書評を書くという課題を与えている。少女マンガ作品としては竹宮恵子「風と木の詩」（1976-1984年）、萩尾望都「ポーの一族」（1972年-）、細川智栄子あんど芙～みん「王家の紋章」（1976年-）などの12シリーズをリストアップし、その中から一つを選んでもらう。書籍は公立図書館で借りたり、新古書店で購入したり、知人や親から借りるなどの方法を各自がとり、連載が長いものは10冊までを読んでそのレポートを書く。1970年代のマンガは現在の学生にとってなじみがなく、「少女マンガを読んだことがない」という学生も多く、はじめは抵抗を感じる学生も多いが、読み終わった後は「最初は読みづらかっ

たけど踏ん張って最後まで読んだら面白くて、読んでよかった」という声がレポートにみられた。

そのほか、ジェンダーの視点から、日本のマンガにおける少女マンガ（女性マンガ）の役割や、比較文化論的に海外のコミックスとの状況の違いなどを学生に伝えている。1950年代の手塚治虫「リボンの騎士」など、クロスジェンダーの問題をかなり早い段階から取り上げているマンガを授業で扱っている。日本ではこのような作品が早い時期から登場し、さらにその後少女マンガが発展し、女性向けのメディアとして確立されていったということを確認しながら、アメリカにおけるコミックスの状況と比較する。アメリカでは1950年代、著名な犯罪心理学者が「バットマンはゲイだ」「コミックスを読む少年は犯罪に走る」といった発言をして、コミックス業界も打撃を受けたということなどを講義で話す。

（4）学生の反応について

学生の反応は全体的にとてもよく、難しいテーマでも真面目に取り組んでいる。自分としても、授業の中で予備知識の少ない学生に対して詳細に説明するために、勉強になり、また、学生の洞察力、世代の違いから自分に見えてこなかったことが指摘され、とてもやりがいを感じる。

（5）マンガを扱う際の注意点

基本的に、テーマとして避けるというものはない。昔の作品（手塚治虫の作品など）において、現在の視点から見て人種・性差別的に見えるものがある場合でも、時代背景を理解するために、無視してはいけないというスタンスを基調としている。マンガ表現に関しては、暴力・性暴力の場面は説明をする際に必要な場合だけ見せることにしている。例えば中沢啓治「はだしのゲン」における原爆投下直後の人々の被爆シーンなどは、残酷表現が苦手だと申告する学生も多いが、やはりそれを見せないと説明しにくい事例（2012年の学校図書室における閲覧規制の問題[6]など）もあるため、必要に応じて提示している。

BL マンガや成年マンガ[7]など性的な描写が赤裸々に入っているものは、スライドにうつすことはしないようにしている。それについては、口頭や文章で表し、画像を使わない。行き過ぎた表現は、気持ち悪い、不快に思う学生もいると思われるからである。実際にそういう反応を得たからというわけではなく、自分としては使いたくないと思っているので、使ったことがない。

マンガやアニメ作品を見せる際には、作品の背景や、出版形態、読者の反応、どのようなところに注目が集まってきたかなどの文脈を細かく説明する。例えば、「攻殻機動隊」のアニメーション映画を見せる際に、マンガ版とアニメ版の違いや、海外での反応、映画「マトリックス」3部作との関係、女性型サイボーグとジェンダー論などについて講義において解説した。この映画の英語吹き替え版を見せていた時に、講義中にちゃんと説明を聞いていなかった学生によるコメントのなかに「この作品には暴力的、性的な場面が多いので、アメリカの作品だとすぐわかります」というものがあり、自分がよくないと思うものは、外国のもの（自分となじみのない文化圏のもの）だと思い込む学生の心理が表れていて興味深かった。もちろん、作品の文脈を真面目に聞いていた学生はこの作品が日本の作品だとわかっていたが、むしろこのような事例について授業内で取り上げれば異文化に対する先入観や差別的な考えについて学生にも面白く話すことができ

る。

（6）大学教育におけるジェンダーに関する授業の必要性

「ジェンダー論」というタイトルの授業は全学共通の教養科目で、200人という受講者制限があるなかで、今年度は600人以上の履修希望者がいた。希望者の約400人が受講できないというのは問題なので、来年度は非常勤の先生を雇うなり、自分が同じ授業を週2回やるなり、何らかの対策を考えている。

自分のゼミには、LGBT（同性愛、性同一性障害など）と関連のあるテーマについて卒論を書きたい学生も毎年数人所属している。現在、大学側からはジェンダー教育について支援してもらっていると感じている。具体的なエピソードとしては、ゼミ生によるプロジェクトとして広報課から学外広報活動を依頼された際に、「クロスジェンダーというテーマでやってください」と依頼され、「リボンの騎士」や田亀源五郎「弟の夫」（2014年-）[8]、ちぃ「花嫁は元男子」（2016年）[9]といったクロスジェンダーをテーマにしたマンガを紹介しながら、ジェンダー・アイデンティティに悩む人への理解を呼びかけるプレゼンテーションを制作した。こうした問題に悩む学生に対し、「大学は味方だよ」というメッセージを送ることができたと考えている。こうした活動は、大学の上層部からも理解・支援されていると感じ、頼もしく思った。

（7）ジェンダーを学ぶ教育においてマンガが適切な題材であると思うか。

とてもそう思う。特に国際的な比較文化論の視点から、これまで海外の人々から、「日本マンガは性的な表現が多い」、「暴力的な表現が多い」と批判されてきたが、海外を見ると、英語圏・フランス語圏では、コミックスやバンド・デシネが未だに男性中心の組織、制度であり、女性向けジャンル作品や女性作家の商業的成功や評論家からの高い評価が与えられることが少ない。例えば、フランスでは女性作家をコミックアーティストとして認めることがほとんどない。日本では少女マンガが、人気があるというだけではなく、本格的なマンガとして地位が確立され、高く評価されてきた。これは海外ではほとんどみられないことである。

Bさんは、「（差別が）多い少ないということではなく、文化によってその差別の表し方が違うということを解説するようにしています」と述べ、その事実に気づいてもらうためには、マンガやマンガ文化そのものも大切な教材だ、という認識が伺える。

3．Cさん［30代、女性、私立大学文系学部所属］

Cさんは所属大学において社会学、メディア論に関する授業を主に担当している。所属学科は、文学部に属しているが、芸術系・表現系学科に近く、マンガを専門としているわけではないが、マンガを学べるということを売りにしていることもあり、マンガに関する講義だけではなく、実技系の授業も過去に担当したことがあるという。所属大学以外でも非常勤講師として授業をおこなっている。

（1）授業について

マンガに関する講義としてはマンガ史やマンガ表現に関する授業として「マンガの現在」「マ

ンガ論」があり、基礎ゼミ関連の授業として「マンガ研究入門」という授業も受け持っている。

「マンガの現在」は全学共通の選択科目で、通年で一コマの授業であり、大体130名ほどが受講する。男女比としては男子の方が３：１（男：女）と多く、それは大学全体の男女比とも対応している。

「マンガ論」は、学科の２年生向けの選択科目で、60名ほどが受講している。たまたま今年度は男子が多かったが、それは学科自体の男子の割合が多いためであり、例年は男女比は同じくらいだった。学科自体にマンガに興味のある学生が多く所属しているため、この授業もマンガに興味がある学生が集まっている。その他はゼミがあるが、ゼミにもマンガに興味のある学生が集まる。

所属大学以外の大学では、非常勤講師として「文化メディア論」、「メディア外国文献講読」などを担当している。「文化メディア論」では女性向けの映画を基本題材にして、現代社会に生きる女性のイメージについて取り上げている。マンガはテキストとして扱っていて、学生に毎週少しずつ読んできてもらい、授業の中で10分か15分間をテキストのための時間を取っている。「メディア外国文献講読」では、海外のコミックスを教材として取り上げる。フィンランドのコミックスや、イギリスのコミックス、アメリカの日系アメリカ人についてのコミックスなどを取り上げ、英語でコミックスを読むという授業をやりながら、アイデンティティや家族観などについて考える。この授業の受講生は女子が多いが、マンガに関心があるわけではなく、海外留学を目指すような学生が受講する。

（２）学生について

自分の所属学科は、芸術系・表現系学科に属するが、実技系科目だけではなく様々なメディアや表現方法を広く学ぶことが目指されている。そのため、芸術や表現活動に興味があるが、美大に通うほどではない、という学生が多い。基本的に大学院に進む学生がおらず、ほぼ全員が就職を希望する。地元企業、特に中小企業を志望し、地元から出たくないというのが特徴的である。通学も、実家から通っている学生が多く、就職の際にも実家から通える範囲を志望する場合が多い。その背景には、現実問題として、この大学に来ている学生が金銭的に裕福な学生が少なく、家にお金を入れている学生が多いという事情もある。このような家庭の経済状況からも、自宅から通える範囲の大学、就職を希望する学生につながっていると思われる。

Ａさん、Ｂさんの場合と異なる点としては、大学全体および学科内の男子学生の比率が比較的多いことが挙げられる。マンガに関する科目を受講する学生の意識としては、マンガに興味のある学生もいれば、「マンガだったら勉強しなくても理解できるだろう」という感覚で受講する学生も多いのではないかということである。

（３）教授法について

特にジェンダーに関する問題を取り上げる場合については、「文化メディア論」では、フランスの女性作家ペネロープ・バジュー「エロイーズ」（2015年）を取り上げている。この作品は、女性の生き方やアイデンティティについて描いたコミックスであり、ストーリーとしては若い女

の子がどうやって生きるかという内容で、学生の関心も引きやすいうえ、絵がかわいいのでマンガをあまり読まない学生でも抵抗がなく読める。さらに、コマのレイアウトが面白く、楽しく読み進めることができるものとして学生にも好評であった。

また、過去に男性のジェンダーを考えさせるものとして本宮ひろ志「まだ、生きてる…」(2007年）を取り上げたことがある。このマンガは、中年男性が主人公で、60歳で定年した後再就職できずに妻と子供に逃げられ、財産も奪われホームレスになり、最終的に山奥で自給自足の生活をしていくというストーリーである。生きていくために男としてのプライドをどんどん捨てていく中で、自分のこれまでの男としての生き方を反省するようになる。つまり、男としてのジェンダーとは何かを考えさせる内容になっている。しかし物語の後半では、若い女が登場し中年男性を好きになるという都合のよい展開になる。そうした終わり方も含めて、男の理想の人生観や都合のよさを表しているともいえる。このマンガは、クラスに男子学生が多いため、男としてのジェンダーを考える題材として適切だと思って選んだ。実際学生はあまりジェンダーというところにピンとは来ていなかったようだが、仕事一筋に生きてきたのにその仕事がなくなって、どうやって生きていくか、仕事がすべてではないのかな、というところは考えているようだった。

（4）学生の反応について

ジェンダーの問題に関しては、どんな学生が参加しているかによってその反応は異なるが、普段からジェンダーの問題に関心を向けている学生は深く考えるし、想像力がない学生は全く興味を持たない。そのような状況の中で、基本的に学生は「自分以外のこと」だと位置づけると関心を失うので、「自分のこと」だと思わせなければどんな話でも理解させるのは難しいため、どんな話でも、学生の想像力が働きやすいように大学生を例に話すなどの工夫をしている。例えば自分の好きなマンガの作家や作品について話しているときは興味を持つが、例えば社会の中の位置づけやメディアとしてどう機能してきたか、社会的な話、抽象的な話になると、自分のことから離れてしまって興味を失ってしまう場合が多かった。そのような経験から、社会的な話題についても出来るだけ具体的に、例を挙げて話すなど、学生に引き付けて話すことを心掛けている。

（5）マンガを扱う際の注意点

授業内の男子の比率が高いため、ジェンダーや性的な話題に関連してマンガを取り上げる際に多少の困難が生じる。基本的には、エロを扱わないというスタンスを取っている。男子学生（特に大人数の授業の場合）にとって、エロティックな表現を客観的に学術的な視点から見るということが難しい場合が多く、性的な表現や問題を笑って片づけようという態度をとる学生もいて、なかなか授業が成立しづらくなる傾向にあるためである。女子のほうが比較的客観的に捉えることが出来る学生が多いと感じるが、女子の中には性的な表現を「気持ち悪い」、「見たくない」という学生も多いので扱いが難しい。

（6）大学教育におけるジェンダーに関する授業の必要性

ジェンダーやエスニシティの問題に鈍感な学生が多いので、必要性は高まっていると感じるが、教育の取り組みが活性化されているとは思わない。まだ学内での取り組みが追いついていな

いと感じている。また、学生の間にジェンダーに対する根本的な誤解もある。例えば、ジェンダーとは女の子に優しくすること、ドアを開けてあげること、などのように誤解している場合もある。

さらに、男子学生に接することが多いため、ジェンダーに対する男子学生の率直な声も聞くことがある。女子学生の場合、ジェンダーの問題は自分の問題として考える機会が多いが、男子学生の場合、むしろ社会的に押し付けられている「男らしさ」の原因を女性に転嫁しまう場合もある。例えば、「どうして男ばかりが働かなきゃいけないんだ、女の子は専業主婦で、月収５万円でも好きなことをやって許されるから結婚すればいいのに、何で男だからってお金を稼がなきゃいけないんだ」と話し「だから女が悪い」という結論に至る男子学生もいる。「男はこうやって生きていかなきゃいけない」という「男らしさ」に関するジェンダー観が固定されてしまっており、「女はその利益を受けているからずるい、文句をいうな」、といった価値観が共有されているため、その価値観に対する疑問視や自分の生き方を考え直すという方向に結びつかなくなってしまう傾向もみられる。

また、学生の性別にかかわらず、カリキュラム全体を通して文化や社会の多様性について考える機会を持てているかどうかによって学生の授業の内容に対する反応が変わると感じている。個々の授業の教え方を工夫することには限界があるように思う。

このような体験談からは、女子学生だけではなく男子学生に対してもジェンダーを学ぶ機会は重要であり、むしろ多くの学生にとって必要とされているのではないかということが示唆される。さらに、個別の科目だけではなく、大学全体のカリキュラムや支援などの大学側の体制も学生の理解に大きく影響を及ぼすのではないかとのことだった。ただ、C さんによれば、以下の項目でも述べるように、「ジェンダー」と面と向かって取り上げると学生が避けてしまう場合もあるので、マンガの授業を通してジェンダーの問題を取り上げることは効果的ではないかということであった。

（7）ジェンダーを学ぶ教育においてマンガが適切な題材であると思うか。

まず、絵的に描かれるのでわかりやすい。女性の視点から内面が語られる・描かれるメディアが他にあまりないので、適切だと思う。さらに、マンガという素材が授業として目新しいので理解しやすそうだ、と関心を持ってもらえることも利点として挙げられる。

マンガを通して授業をおこなうことで、「ジェンダー」「フェミニズム」といった言葉を聞いた瞬間に、「人権の授業か」と思って心を閉ざしてしまうことが避けられると思う。上記の「まだ、生きてる…」というマンガを取り上げたときも、初めからジェンダーを押し出すと学生は避けてしまう[10]ので「ジェンダーのことをやるよ」という態度ではなくて、「マンガのことをやるよ」という感じでやると、読んでくれた。社会的な、難しい話題だと拒否してしまいがちなテーマを、学生に親しみやすく身近に感じさせる効果があるのではないか。さらに、マンガ作品の中では具体的なシチュエーションをもって問題が描かれるので、そういう点でも学生の関心を引き付けやすい。

Ⅳ．３名のインタビュー結果から見えてくるもの

３名へのインタビューを通して見えてきた、特に注目されるべき事柄を以下にまとめる。

（１）ジェンダーに対する学生の意識

３名とも、自身の担当授業を受講する学生はジェンダーに対する知識が少なく、自分の問題として受け止めていない場合が多いということを述べている。具体的には、ジェンダーや性差別の問題などに直面する機会がなかったことや、それまでの教育においてジェンダー教育を受けてこなかったことに加えて、社会的に常識とされている家族像や女性／男性像を無批判的に受け入れていることが要因として考えられるということである。Ａさんはそれが地域的な問題でもあることを示唆していたが、Ｂさん、Ｃさんのインタビュー内容からは、別の地域の、そして男女比率の異なる大学においても同様なジェンダーに対するスタンスが見られることから、日本の大学生の一般的な傾向としても当てはまるのではないかと考えられる。

（２）ジェンダー教育にマンガを用いることの利点

特にＡさんとＣさんに共通する意見として、上記のようなジェンダーに対する関心の薄い学生に対しては、初めから「ジェンダー」を前面に押し出した授業をおこなうよりも、マンガなど別な形で授業をおこない、その中でジェンダーに関する話題やトピックを扱う、という方が学生にとって親しみやすさを感じ抵抗なく関わることができるということだった。「ジェンダー」というと、理解が難しそう、と拒否してしまう学生に対しても、マンガから出発することで、知らず知らずのうちにジェンダーについて考えることができる、ということである。さらに、マンガ作品には女性の内面や個別の事例などについての具体的記述がなされているものも多数存在しているため、そうした作品を読むことで具体的な事例について想像力を働かせやすいということが挙げられた。

Ｂさんからは、少女マンガや女性マンガというジャンルの特異性について挙げられた。日本人の学生にとっては当たり前に思えるが、国際的にみて、「女性の、女性による、女性のための」メディアがこれほどまでに社会的な認知度や多くのファンを持って一つのジャンルとして自立していることは珍しいことだからである。「（差別というものは）多い少ないということではなく、文化によってその差別の表し方が違うということです。それに気づいてもらうためには、マンガも大切な教材だと思います」というＢさんの発言からは、それぞれの文化において差別の内実や表し方が異なるということに学生が意識的になるための素材として、マンガが重要であるということが示唆される。

（３）授業内でマンガを用いる際の注意点

ジェンダーや性的な問題を扱う場合、特にマンガ作品の中の図像をどのように取り上げるかということに対して、３名とも十分に注意を払っているということが伺えた。共通するのは、直接的な性行為のシーンなどは図像として提示することは避け、必要がある場合は口頭や文章で説明するということであった。さらに、Ａさんは、トピックとしてBLなどの同性愛に関わるものを

取り上げるときには、授業の冒頭にその旨を伝え、注意をしておくという工夫をしているということだった。学生の心の準備を促すためにも、余計なトラブルを避けるためにも、事前の説明や注意は重要であるという意見である。

（4）大学内のサポート体制

3名とも、大学全体のジェンダー教育に対する取り組みや支援の大切さに言及していた。興味深いことに、AさんとCさんの大学ではジェンダー教育に関する取り組みがほとんどなされていなかったが、Bさんの大学では積極的に大学側が支援体制を整えていたという違いが浮かび上がった。Aさんの大学において「ジェンダー論」の授業が4年生の後期に設定されていることや、Cさんが「カリキュラム全体を通して文化や社会の多様性について考える機会を持てているかどうかによって授業の内容に対する反応が変わると感じていて、個々の授業の教え方を工夫することには限界があるように思う」と語るように、個々の授業内容だけではなく、大学全体のカリキュラム構成や科目の内容も重要であるとのことであった。また、そうしたカリキュラムに現れる部分以外にも、大学教員内の女性教員の割合や、学内の要職に女性が就いているかなど、学内におけるジェンダー意識も学生に影響を与えうるということが見えてきた。

Ⅴ．まとめ

今回の大学教員3名へのインタビュー調査から、ジェンダーとマンガを取り上げる授業に関して、非常に多くの実体験に基づく証言を得ることができた。全体としては、3名ともジェンダーを学ぶ教育においてマンガを取り上げること、もしくはマンガを学ぶ授業においてジェンダーを扱うことを必然的で重要なこととして考えているということである。さらに、マンガを含めた言語文化に関する授業の中で扱うことで、メディアに対する感受性を高めながらジェンダーに対する意識を高めることが期待できることも見えてきた。

ジェンダーに関わる教育は、幅広く人権教育として、社会で生きる市民の教養として大学という最終教育機関において学ぶことが重要である。世界経済フォーラムによるジェンダーギャップ指数における日本の順位が2015年の145か国中101位から、2016年では144か国中111位と後退し[11]、特に経済参画や政治参画において低い値を示していることからも、大学教育においてその底上げを担っていくことが求められる。

今後の調査では、引き続きジェンダーとマンガに関する授業をおこなう教員へのインタビューをおこない、資料を蓄積させ考察を深めていくことを目指したい。

参考文献

私市佐代美、髙山百合子「女子高等教育の現状とこれから（私市佐代美氏講演）［含質疑応答］」『筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報』第20号、2009年、pp. 345-363.

注

1　特に、マンガに関する授業は学生には目新しかったようで、全授業終了後の意識調査でも「今までとは違った視点でマンガを捉えることができた」「日本語とマンガの接点を考えることができた」という声が寄せられた。

2　その他、東京工芸大学芸術学部マンガ学科（2007年設立）、神戸芸術工科大学先端芸術学部まんが表現学科（2010年設立）など現在その数は20近くにものぼる。

3　私市、髙山（2009）は女子大学における女子高等教育の現状と課題を報告した先駆的な研究といえる。

4　大城房美編『女性マンガ研究』（青弓社、2015年）は、女性学、ジェンダー論とマンガ研究の領域横断的研究として重要な成果であり、報告者も自身の授業で取り上げている。

5　BL（ボーイズラブ）マンガとは、男性キャラクター同士の恋愛を描いたマンガ。アマチュア作家による二次創作の場合、既存のキャラクターを用いる場合も多い。読者のほとんどは女性であり、BLを好む女性を指す呼称として「腐女子」という言葉も一般化しつつある。

6　2013年８月、中沢啓治「はだしのゲン」について、松江市教育委員会が2012年12月に松江市内の市立小中学校に対して閉架措置及び貸出閲覧制限を求めていたことが報じられたことで社会的にも話題となった一連の問題。

7　性表現に主眼を置いたマンガのジャンル。男性向けのエロマンガ。出版社の自主規制により、18禁などを表すゾーンニングマークがつけられ、販売が制限されている。1980年代以降、レディースコミックなどの女性向けのものも増加している。

8　『月刊アクション』（双葉社）にて連載中の青年マンガ。ストーリーは、小学生の娘・夏菜を育てるシングルファザーの弥一のもとへ、彼の亡き双子弟（涼二）の結婚相手であったカナダ人男性・マイクが訪れ、共同生活をする中で、同性愛者に対する自身や社会の偏見に気付き、理解を深めていくというもの。第19回文化庁メディア芸術祭マンガ部門優秀賞受賞。

9　男性であった著者が性転換をして女性として結婚するまでのエピソードを描いたマンガ。

10　公開研究会の参加者から、ジェンダーの問題を避けようとする人たちの持っているイメージとして、「ジェンダー＝ウーマンリブ」というものがあり、これは学生だけではなく日本社会全体に当てはまる傾向ではないかという指摘があった。

11　内閣府男女共同参画局「『共同参画』2017年１月号」http://www.gender.go.jp/public/kyodosankaku/2016/201701/201701_04.html（2017年５月23日最終閲覧）

（たけうち　みほ：人間文化研究所　客員研究員）
（たかやま　ゆりこ：日本語・日本文学科　教授）
（おおぎ　ふさみ：英語学科　教授）